第59回　熊本県保育研究大会　玉名大会　　　　　　参加者：92名

【第三分科会】テーマ：気になる子、障がいのある子への保育

　近年、子ども家庭福祉を取りまく国の動向が大きく動く一方で、子どもと家庭の置かれている環境も多様化している。保育所を利用する子どもの保育についても、一人ひとりの状況やニーズをふまえた個別の対応がより重要になってきている。本分科会は、｢養護と教育｣を一体化に提供する保育所保育の特性を生かした｢子どもの発達保障｣に関する実践・研究を通して協議を行う。

座長：原 孝行(せん月保育園)

助言者：永野 典詞(九州ルーテル学院大学 教授)

意見発表者：宮川 鮎美(竹迫みのり保育園)、田代 優子(山鹿保育園)、永田 ミキ(おこば保育園)

幹事：藤吉 続治(小天東保育園)

記録：大佐古 未緒里(鍋保育園)、田上 晋士(鍋保育園)

５．まとめ・その他

キーワードは個別性で、発達障がいは一人ひとり違うので、個々をしっかりと見て、それぞれの子どもに合わせた関わり、支援、対応が必要である。また、保育士同士が褒め合う姿を見ることで、子どもが褒め合えるようになる。保育者同士の人間関係が一番大切である。また、保護者の子育ての困り感を一緒になって考え、保護者の身になって関わっていくことが、保護者支援にとって大切なことである。

４．グループ討議

〈協議の柱〉

(１)子どものニーズに沿った環境作りについて

(２)特別な配慮の必要な子どもへの支援の在り方

(３)インクルーシブ保育の実践について考える

〈討議のまとめ〉

・ｸｰﾙﾀﾞｳﾝする場所の確保や子どもにとって刺激の少ない保育。

・絵ｶｰﾄﾞやｽｹｼﾞｭｰﾙﾎﾞｰﾄﾞの活用、様々なものを視覚化させていく。

・支援会議や職員間での話し合いを多く持って共通理解を深める。

いうのは、職員の意思を統一することがとても重要。そこには質の向上が欠かせない。障がい児保育は大変だが大事という思いを持つことが大きな影響を及ぼしてくるのだと思う。

３．発表者　おこば保育園　園長　永田 ミキ

テーマ：「ともに育ちあう園をめざして～20年間の障害児保育実践を振り返って～」

〈考察〉

　20年前に重度肢体不自由のBくんと出会い、その実践で得た学びが根底にある。これまで３0名を超える配慮の必要な子ども達との関わりの中で、共通するキーワードは5つ。①個別に具体的に本人の特徴を見る「個」の理解②細やかな情報共有と全職員の共通理解③達成感を味わえる工夫をしながら育てる主体性④子どものペースで臨機応変に自立へ⑤同じ方向を向いて共に歩む保護者との協働関係、である。実践の中で障がい児やその周囲の子ども達、そして保育士の変化にも注目。そこは｢支援される側｣｢支援する側｣という構図ではなく、相互に作用し合い、育ち合う関係があった。また、保育士の人間性も大切な要素であり、保育の質と専門性の向上はもちろん、その保育士を支えるしっかりとした組織でありたいとまとめた。

〈助言内容〉

　障がいがあっても一緒に保育、一緒に生活をすることが当たり前だという考え方がベースになっている。インクルーシブという言葉すらなかった時代に、地域の専門機関と連携し、保護者との信頼関係を構築。積極的に学び続けながら、発達障がいのわかりにくさを理解し、保護者や子どもに伝えていく。これは保育ソーシャルワークの実践そのものである。また、保育士として適切な対応をするためには、専門性の向上と共に、良い関係性の中で仕事ができているかが重要。協力し、協働する職員関係は素晴らしく、対人援助者としてどうあるべきか常に考えてほしいと結んだ。

２．発表者　竹迫みのり保育園　主任保育士　宮川 鮎美

テーマ：「Aくんと友達の楽しさの共有～保育士から友達へ。広がって行く笑顔～」

〈考察〉

　巧技台やさくらさくらんぼリズムを取り組んでいる園である。感情、情緒、言葉の表出にもつなげることができる。1歳3か月の頃に短期入所した際から表情が乏しく、発達段階でも遅れが見られた。再入所し、4月の進級にあたり、コミュニケーションを図り、信頼関係を築き始めた。職員全体でも話し合い、専門機関よりアドバイスを頂いた。保護者にも園での様子をこまめに伝え、Aくんにとってストレスにならないよう家庭の延長での保育に努めた。その結果、徐々に意思疎通が図れることも増えたり、友達に興味を持ったりと変化が出てきたが、一方で課題も見えてきた。①発達につながる関わり。②保育士が気持ちを代弁しつつAくんには友達との関わり方、クラスの子にはAくんがどういう風にしたら困らないかを伝えること。③カードに頼りっきりの指示待ちにならないようにすることである。今後も職員間で共通理解をし、保護者や専門機関と連携をとり、Aくんに向き合っていくことでまとめた。

〈助言内容〉

　巧技台のような取り組みの中で、何か一つでも目的を持って子ども達に伝えていくということはとても良い。自然の中で遊ぶことで何が効果があるのか、それをどういう風に活かしていくかを考えていくことが必要。また、ごほうびシールといった写真や絵で示すこと、視覚化することは、様々な場面において障がいのない子にも有効であると思われる。保育士がいかに障がいのある子を捉えるか、どういうイメージを持つかによって、障がいのない子も影響を受ける。障がい児保育と

１．発表者　山鹿保育園　保育士　田代 優子

テーマ：「気になる子、障がいのある子への保育～子どものより良い育ちと職員の資質向上を求めて」

〈考察〉

　丁寧な関わりが必要な子に対して、個別の指導計画、保育支援計画を作成し、実践を行っている。その中で動画を撮り自分の動きを確認したり、絵を描いて説明するなど具体的な手立てを実践することで、保育士や子ども、双方において良い関係を築くことができた。そして子ども一人ひとりが自分らしさを発揮でき、良い育ちにつながることがわかった。一方で、保護者には熱心に取り組んでいるということをうまく発信できていないという課題がある。

〈助言内容〉

　キーワードは、支援が必要な子どもたちへの取り組みは職員の質の向上につながる。しっかりとした支援を伴うということは、根拠のある保育が必要。今の保育は、保育だけでなく、相談援助を考えていかなければならない。そこで大事なのは職員が共通理解をもって子どもの保育に取り組むこと。その中で、PDCAサイクル実践や、振り返ることが大切。また、動画を活用し実践に活かされいる点において、行動を見つめ直す良い取り組みである。今後は、そうした取り組みをどう言語化していくのかが大事になってくると思われる。